

3.新たな火種、止むことのない争い

3.新たな火種、止むことのない争い

1945年に第二次世界大戦が終わっても、1989年に冷戦構造が崩壊しても、いままお宗教や民族やイデオロギーの対立による争いはやみません。また、基地や核兵器などの解決困難な問題も続いています。争うことも憂えることもない「戦後」は、まだ訪れてはいないのです。

ここでは、スリランカで四半世紀つづいた内戦(1983-2009年)の悲劇を題材にした作品、パキスタンとインドの間で争うように開発された核兵器を批判する作品、9・11以降のアフガニスタンの混乱を伝える作品など、現代の作家の目線 で表現された戦争を紹介します。

また、いまの日本人にあらためて熟考をうながす二つの作品を紹介します。ひとつは、劣化ウラン弾の影響と言われる障がい児を描いた山口啓介の版画です。1991年の湾岸戦争以降、イラクでは劣化ウラン弾が使われ、障がい児の出生率や白血病の罹患率が高まりました。山口の作品は、唯一の被爆国であり福島第一原発事故を経験した日本のわたしたちにとって、他人事ではすまされない問題を突きつけてきます。もうひとつは、比嘉豊光が写した「日本復帰」(1972年)前後の沖縄の写真です。彼の写した沖縄の姿は、45年という時を一気にとび越えて、米軍基地の辺野古移設にゆれる沖縄のいまに直結するものではないでしょうか？

<p>チャンドラグプタ・テヌワラ　1960ー</p>



スリランカ生まれの美術家。26年間つづいた内戦の時代、多くの作家が、身近でおこる戦火をテーマに作品を作った。テヌワラもそのひとりで、「ドラム缶時代の女たち」は、スリランカの街のいたる所にバリケード代わりに設置されたドラム缶を使ったもの。迷彩模様 のそれらは、内戦状態の社会を象徴している。絵画には、悲しみにくれる女性、赤ん坊の将来を案じる蒼白の母親、予測できない悲劇を心配する女性、戦争の恐怖におびえる妊婦が描かれる。組織的な暴力である戦争は、バリケードのむこうに避難している女性や子どもなど、弱者のうえにも容赦なくふりかかることを告発する。黒々した筆線が緊迫感を効果的に作り出している。

<p>比嘉豊光　1950ー</p>

沖縄出身の写真家。沖縄に暮らす庶民の視点から、いままも深刻な問題である沖縄の戦争、「日本復帰」、基地の問題、また日常生活に生きる沖縄の信仰や島言葉などを取材。それらを、沖縄の内側からの声として、庶民の日常の営みとともに写真や映像に記録する。

《赤いゴーヤー》は、比嘉の大学時代の写真。「日本復帰」前後の沖縄を写したもので、大半が、動く車や路線バスの中からノーファインダー（ファインダーをのぞかず撮る方法）で撮られている。被写体や構図、フォーカスをあえて選ばず、流れる風景にレンズをむけて無作為にシャッターをきることで、むしろありのままの沖縄の姿が浮かびあがっている。眺めるように写された風景は殺伐としており、日に翻弄される沖縄の運命と地位に対する比嘉の閉塞感や憤り、悲しみも表

3.新たな火種、止むことのない争い

わしているだろう。比嘉は、あの時代の風景をいままお過去のものにできない沖縄の現実だと考える。

<p>山口啓介　1962ー</p>

兵庫生まれの美術家。自然の命と人間の共生をテーマに、植物や花などの自然をモチーフとした透明感のある版画や絵画、あるいはそれらを材料としたインスタレーションを手がける。一方で、人の暴力によって失われる命によりそうように、原爆や原子力に対して批判的なまなざしをむける。

《DU Child》は、劣化ウラン弾（DU）による被爆が指摘されるイラクの子どもの肖像画。イラクの戦争では、米軍によって大量の劣化ウラン弾が使われた。山口は、2004年の春から夏にかけ、毎日のように遠くから送られてくるネット画像で、劣化ウラン弾に破壊された街並みや砂塵の舞う風景、被害をうけた子どもたちの写真を見る。とりわけ声をあげられない子どもが受けた被害は、作者のスタジオ前にひろがる水田ののどかな風景とはかけ離れた現実だったと言う。その理不尽さに突き動かされて、「劣化ウランの子ども」を彫刻刀で荒々しく彫り出している。ゆがんだ頭部、つぶれた目鼻口、細い腕は、悲劇の深刻さを物語る。約40個の版木を組み合わせて作られた大型木版画は、作者がはじめて挑戦したものであり、制作に対する強い動機を感じさせる。　DU Child　2005年

<p>ムハンマド・イムラーン・クレイシー　1972ー</p>

パキスタン生まれの画家。細密画の学伝統技法を使いながらも独創的な表現をこころみ、社会的なテーマを描き出す。《もっとよくしよう》は、細密画の伝統と革新について疑問を表現したもの。既存の印刷物から切り取った伝統的な細密画は、印刷物であっても立派に額装される一方、作者がロケットを描いた細密画はくしゃくしゃにされと並置されている。ロケットが描かれるのは、インドとの緊張関係がつつくパキスタンで、文化はもちろん教育や厚生よりも国防に国家予算がさかれ、「ミサイル」外交が繰り広げられていることへの批判である。クレイシーは、自身の現代細密画が周囲に受け入れられず、もみくちゃにされていることを示しつつ、同時に核兵器の開発が優先される政情をも握りつぶそうとするのである。

<p>ハーディム・アリー　1978ー</p>

アフガニスタン人画家。パキスタンのカラーチーとアフガニスタンを行き来しながら、母国アフガニスタンの現状と未来を憂えた社会的なテーマの作品を制作。一見、絵本の挿絵のように優しく繊細な小画面には、制作当時戦火にあったアフガニスタンの物語が綴られている。

4.イマジン

ー争いのない世界へ



《大砲と天使》は、2001年のタリバーンによるバーミヤン遺跡の破壊に対する憤りから描かれた。バーミヤンは、アリーの故郷であり遺跡は子どもの頃の遊び場であったが、タリバーンの占拠と破壊によって家族はふる里を追われた。いわばふる里のシンボルだった遺跡の破壊は、アリーにとってまさに故郷喪失に等しいものだったのである。絵では、遺跡を背景に天使と大砲が描かれている。天使が紐でひくのは、バーミヤンの大仏の頭（聖なる蓮の花を圖案化）だが、大砲による破壊で無残にもそれは台座から転げ落ち、あたりは血に染まっている。

《誰もいない台所》は、作者が当館のレジデンス事業*で滞在中に制作したもの。アフガニスタンと福岡の小学生が描いた鉛筆画を、アリー自身の絵に転写している。アフガニスタンの子どもの絵には、見慣れた爆弾や銃、大仏を破壊し人を狙う兵士や戦車、降参の手をあげる人、食料を落とす飛行機と落下物を受け取ろうとする人などが目立つ。一方、「アフガニスタンの子どもに見せたい」と福岡の子どもが描いた絵は、動物や花やアニメのキャラクター、校庭で遊ぶ姿など、日ごろ目にする物や自分たちの屈託のない姿である。アリーは自分の絵に子どもたちの絵を慎重に組み合わせている。例えば、福岡の子どもが描いたライオンには、アフガニスタンの動物園で飼育できなくなり、手榴弾で殺されたライオンの話が重ねられているのである。タイトルの「誰もいない台所」とは、長く海外の侵攻をうけ、アフガニスタン人主体の社会がいまだ十全に実現されていない祖国を、アフガニスタン料理を作る主人が不在の台所と見立てたもの。

「チューリップが咲くと平和がやってくる」と、アリーは言う。戦争が終われば、大量の血がしみこんで大地は肥え、緑がよみがえり、草木は萌え花々が見事に咲くと言うのである。福岡の子どもが描いたチューリップや黄色い花に、繰りかえされる戦争が終わり、両国の子ども置かれた環境のギャップが埋まることを、祈るかのようである。

*作家や研究者を一定期間招へいして制作や研究、市民交流を実施する当館の事業。アリーは、2006年5月9日～8月7日まで滞在制作した。

<p>誰もいない台所　2006年</p>

4.イマジン

ー争いのない世界へ

ハーディム・アリーの《誰もいない台所》に転写されたアフガニスタンの子どもの絵は、爆弾や銃、兵士や戦車などでした。山口啓介の《DU Child》の子どもは、劣化ウラン弾の被爆が疑われる障がい児でした。いかなる子どもも、武器をもつことがないよう、核の脅威にさらされることがないよう、「イマジン」の歌詞のように、国家や宗教や所有欲を越えて「世界が一つになる」未来を、わたしたちは希求します。例えばそれは、親子がいつでも、どこでも、無防備に熟睡できる未来かもしれません。

<p>イ・デワ・プトゥ・モコ　1934ー2010</p>

インドネシア・バリの生まれ。1970年代に「ブンゴセカン・コミュニティ・オブ・アーティスト」を結成し、優美な花鳥画でバリ絵画の新しい様式を築いた。その後、1980年代末からは、バリ絵画の通常の主題や定型的な表現を避けて、日常的なものや人間の性や出産を描くようになり、従来のバリ絵画の枠組みを超える。《熟睡する母と子》について、モコは「子供と母親が、サロン（腰布）がはずれているのにも気付かないくらい熟睡している」と語る。



<p> </p>

鹿児島市立美術館
翰林画廊
宗像市市民協働・環境部
宗像市南郷小学校
中村研一・琢二生家美術館
占部康行
古城江寛
中村嘉彦
洲上友香
馬目世母子

小企画展 戦後70年をむかえて
イマジンー争いのない世界へ
2015年6月11日(木)ー9月1日(火)

〔編集／執筆〕ラワンチャイクン寿子

〔発行〕福岡アジア美術館
〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1 リバレインセンタービル7・8階
Tel: 092-263-1100 http://faam.city.fukuoka.lg.jp/

〔デザイン〕田中幸洋 (GRAM TRUSS)

〔印刷〕株式会社西日本新聞印刷

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

小企画展 戦後70年をむかえて

イマジンー争いのない世界へ

IMAGINE: Visions of a World without War

^[1] *とくに所蔵先を明記していない作品は、福岡アジア美術館の所蔵となります。

1.日本による戦争

1.1.第二次世界大戦

1.2.第二次世界大戦以前

19世紀末から20世紀前半、日本は朝鮮半島や遼東半島から中国へ、また台湾から東南アジアへと、軍勢力を背景に領土拡大を目指しました。朝鮮半島の利権をめぐった日清戦争(1894-95年)、朝鮮半島と中国東北部(満洲)の權益を争った日露戦争(1904-05年)、そして満洲の占領をもくろんだ満洲事変(1931-33年)、中国に侵攻した日中戦争(1937-45年)からアジア全域へ拡大した太平洋戦争(1941-45年)。わずか半世紀の歴史には、おびただしい犠牲者を出したいくつもの戦争が並んでいます。そして、その結果、台湾と朝鮮半島の植民地化、満洲の実行支配、東南アジアの占領という、日本による植民地経営と他民族の支配が平行して行なわれたことも、忘れることはできません。第1章は、日本による戦争をテーマにしています。アジア各地へ従軍画家としてわたった、福岡ゆかりの古城江観と中村研一をとりあげます。彼ら日本人の目に対して、太平洋戦争の戦場となったフィリピンの画家の目として、フェルナンド・アモルソを紹介します。異なる立場の画家の目は、戦争の何を描きだしているのでしょうか。そして今日、戦争の記憶を風化させないために表現する、マレーシアのウォン・ホイチョンと沖縄の山城知佳子の「日本による戦争」を紹介します。ふたりの作品は、人間の心の闇にむきあいながら平和をねがい、過去を記録し未来へつなごうとする仕事です。

	
古城江観　1891―1988	

鹿児島出身の日本画家。人物画、風景画を得意とし、文展・帝展で活躍。1922年に台湾を訪問後、東南アジア、インド、エジプトなどを遊歴し、フランスへ渡る。パリに長く滞在し現地のサロン展などに参加。1933年にイギリス、アメリカを経て、数千点のスケッチをたずさえて帰国。1938年に従軍画家として日中戦争の情報収集や戦況報告に従事して以降、海南島から東南アジアへも派遣されており、『海南島』『海口上陸戦記録』『紐育制圧の図』など戦争記録画を制作。



「中支」のスケッチ 1938年　古城江寛氏所蔵



海南島のスケッチ 1938-40年頃　古城江寛氏所蔵

	
中村研一　1895―1967	

福岡出身の洋画家。東京美術学校卒業後すぐから帝展で頭角をあらわす。1923年から5年間パリへ留学。帰国後も帝展で連続特選をとるなど活躍。戦時中は従軍画家として東南アジアへ派遣され、『コタ・バル』（現在、東京国立近代美術館保管）をはじめ17点の戦争記録画を制作した。優れたデッサン力、安定感のある構図、落ち着いた色彩で人物や風景を写実的かつ平明に表現した。義父が戦艦伊勢の艦長だったこともあり、研一は海軍関係の仕事をしている。（錦旗「御召艦比較」）もその一つ

錦旗「御召艦比較」 1933年　宗像市所蔵

海南島のスケッチ 1938-40年頃　古城江寛氏所蔵

「中支」のスケッチ 1938年　古城江寛氏所蔵

海南島のスケッチ 1938-40年頃　古城江寛氏所蔵

中村研一→琢二兄弟生家美術館所蔵

	
古城江観　1891―1988	

鹿児島出身の日本画家。人物画、風景画を得意とし、文展・帝展で活躍。1922年に台湾を訪問後、東南アジア、インド、エジプトなどを遊歴し、フランスへ渡る。パリに長く滞在し現地のサロン展などに参加。1933年にイギリス、アメリカを経て、数千点のスケッチをたずさえて帰国。1938年に従軍画家として日中戦争の情報収集や戦況報告に従事して以降、海南島から東南アジアへも派遣されており、『海南島』『海口上陸戦記録』『紐育制圧の図』など戦争記録画を制作。



「中支」のスケッチ 1938年　古城江寛氏所蔵



海南島のスケッチ 1938-40年頃　古城江寛氏所蔵

	
中村研一　1895―1967	

福岡出身の洋画家。東京美術学校卒業後すぐから帝展で頭角をあらわす。1923年から5年間パリへ留学。帰国後も帝展で連続特選をとるなど活躍。戦時中は従軍画家として東南アジアへ派遣され、『コタ・バル』（現在、東京国立近代美術館保管）をはじめ17点の戦争記録画を制作した。優れたデッサン力、安定感のある構図、落ち着いた色彩で人物や風景を写実的かつ平明に表現した。義父が戦艦伊勢の艦長だったこともあり、研一は海軍関係の仕事をしている。（錦旗「御召艦比較」）もその一つ

錦旗「御召艦比較」 1933年　宗像市所蔵

海南島のスケッチ 1938-40年頃　古城江寛氏所蔵

「中支」のスケッチ 1938年　古城江寛氏所蔵

海南島のスケッチ 1938-40年頃　古城江寛氏所蔵

中村研一→琢二兄弟生家美術館所蔵

	
フェルナンド・アモルソ　1892―1972	

フィリピン生まれの画家。南国のロマンチックな風景や愛くるしい女性像を、光を意識した明るい色彩と柔らかな筆触で描きだし、フィリピン近代絵画の一典型を作りだして人気を博した。甘美な絵画は印刷物でも流通し、多くの追随者を生んだ。

日本占領期(1942-45年)のアモルソは、甘美な作品を制作する一方で、実際の出来事にもとづいた記録的な作品も制作した。そのテーマや暗鬱な表現は、アモルソの画業においては例外的であるが、戦下の日々の経験が、目を犠牲者や廃墟へむけさせたと思われる。バターンは、日本軍による「死の行進」が行われた場所。収容所までの約120kmを、捕虜の米比兵、戦火に追われた難民たち約8万人が行進し、その間、日本軍による残虐行為、マラリアや赤痢などの病気、食料不足などによって多くの犠牲者が出た。フィピンでは後に、愛国と抵抗を象徴する地となっている。本作は「行進」の翌年に制作された。傷ついた兵士によりそい天を仰ぐ少女は、聖母マリアのように神々しく表現されるが、同時に鑑賞者を意識したロマンチックさも垣間見られる。同図柄の作品が複数枚残り、1967年には戦後25周年記念切手にも採用された。

イントラムロスはマニラ最古の地区で、16世紀にスペインが築いた城塞都市。1945年の日本軍と米軍の戦闘では多くの市民が巻き添えになり、米軍の砲撃によって市街地は破壊された。（廃墟のイントラムロス）は、爆撃間もない時期の惨状を描いた記録性の高いもので、誰もいない風景には戦争のひきおこす虚無感や絶望感がただよう。

暗い穴 2009年

暗い穴 2009年